
俺×恋メイドは(妹) 3 ~ The Lily Story ~

森神。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺×恋メイドは（妹）3 The Lily Story

【Nコード】

N2706G

【作者名】

森神。

【あらすじ】

俺×恋メイドシリーズ第三段。谷山高志に春が訪れた。

上（前書き）

今作の著作権は、同人グループ黒文屋のAyaに有ります。今作は、
本文登は、一切関係ございません。

上

皆さん。

お久しぶり！

谷山高志です。

1・2共に読んでくれた？読んで無い人は読めよ！

今は、高校二年の三学期。ぽかぽか陽気な春です。

突然ですが、ハルはご機嫌ナナメです。

理由？

あー、えーと、今朝、俺がハルの着替えを見てしまったからです。

え、どうだったか？

いや、胸とか凄かつて、そんな事言えるか！

…と、皆さんすいません。今は授業中なのでここいらでおひらきと
言う事で…

と、言っても、今から睡眠タイムです。

おやすみなさいー

えー、おはようございます。

時刻は3時。

あれから、2時間が過ぎました。

科目は、数学から国語へと変貌していました。

「じゃあ、P48から上野さん、お願いします。」

お、ちょうどハルの番だ。

「……………」

あれ、返事がない…

「上野さん？」

俺は身を起して、ハルを見る。
寝てます。

先生も異変に気付いたが、スルーした。

「じゃあ、谷山君お願い。」

その言葉が耳に届き、先生がこちらを向く前に俺はタヌキ寝入りをとった。

寝ている姿を見た先生は、軽く無視して、次の生徒を指名した。

ちなみに、居眠りには、エコヒイキがある。

普段全然寝無い人〃寝てもスルーされる。

たまに寝る人〃けっこう怒られる。

睡眠の常習者〃無視。

ちなみに俺は神であり、この場合、誰も起こしてくれない。

ちなみにハルは全然寝無いグループの人、つまり、別次元の人なのだ。

休み時間、俺はハルを起こした。

「何？」

「あ、えーっと、寝てましたので。」

「あつそ」

一蹴りされた。まだ機嫌が悪い。

その後、ハルの機嫌は一行に直る気配がなかった。

ちなみに今は夕食である。夕食と言つての、時間は9時だ。

何時もなら、会話の弾むハズなのだが――

「ハル、醤油取つて」

「…自分で取れば」

と、まあ不思議な空気である。

今ふと思ったのだが、ハルは基本怒らないので、怒つたのを見たのは今日が初めてだ。なんか、ヤンキーっぽい言葉遣いである。

今までの物語からいえば、なんだか俺が謝つて無いみたいだから、一様訂正しておくが、見たあとの朝食の時間にちゃんと土下座して謝った。

見たのは悪かったがここまで怒らんでも…。

俺は夕食を食べ終わると、風呂に入り寝た。

何時もなら

「俺の時代がキター」などと言いながら、朝までハイテンションなのだが、今日は少しばかり気分が悪い。まあ触らぬハルに祟り無しだな。

でわでわ皆さんおやすみなさい。

翌朝――

昨日は早く寝たので目覚めがいい。

一階へ下りる。

ハルがすでに朝食を食べていた。

「あのく、ハルさん？」

「何？」

「そろそろ許して貰えないでしょうか？」

「何を？」

「昨日の件」

「ごめん、それ無理」

「…」

「なんてね、もういいよ。」

その言葉を聞いて俺は朝食を食べた。

「ありがとうございます。ハル様」

あれ、物語の設定上ハルは俺のメイドのはず。何だか立場が逆のようだ。

まあ良いけど。

朝食を食べ終わった俺とハルは学校へと向かった。

学校に着いた。
靴箱を開ける。

「……………」

俺は言葉を失った。

そこには、一通の手紙。

通称ラブレター。

俺にも少し遅い春到来です。

とりあえずハルにバレないように、それをポケットに隠し、教室に入った後、真っ先にトイレまで駆け込んだ。

個室の中、一人だけなのたが変な空気が漂っている。

そして、封を開け、中を見た。

『今日、放課後体育館裏に来て下さい。』

差出人不明か。

こりゃ、会って見ない事には分からんな。

トイレを出た後、教室に戻った。

「お兄ちゃん、お腹壊してるの?」

ハルが心配そうに聞いてきた。

「あつ、いや。」

大分緊張していて言葉が出ない。

こんな調子で今日一日を過ごした。

えゝ、まちに待った放課後です。

「お兄ちゃん帰ろ!」

何時もならこの我がメイドと一緒に帰るのだが――

「悪い、この後少し用事があるんだ。」

「ふうゝん」

「じゃあ待ってるよ。」

「いや、時間かかるから先に帰つていて。」

「怪しいな。何か隠し事して無い？」

我がメイド恐るべし。

「いいや、何も隠してません。」

「まあいいや、先に帰ってるね。」

よし、何とか場を誤魔化せた。

そのまま体育館へ向かった。

俺が体育館裏に行くと、そこにはすでに人影があった。

俺はその女性を知っている。

いや、この学校に通うものなら、誰でも知っている。

ハルより名前が知れた女性。

大山手高校一可愛いとされている

我がクラスの誇る天才アイドル――

『かさきゆり 香咲百合』

さんだ。

上（後書き）

よろしければ感想など頂けるとありがたくて、Aya様が驚きます。

中

「え〜と、香咲百合さんですね。」

俺は、体育館裏で立っている彼女に声をかけた。

「はい…」

何や緊張しているようだ。

「え〜と、この手紙を書いたのは、貴方でしょうか？」

「はい…。迷惑だとは思ったのですが…」

「いやいや、とんでもない！迷惑だなんて…」

本心からである。ラブレターを貰って迷惑になる人なんてそうそういない。

「で、どのような用件でしょうか？」

俺も大分緊張しているのか敬語である。

「あのー。貴方の事が好きです。その…っ、付き合ってください。」

「え〜と、はい、喜んで。」

その言葉を言った瞬間、彼女は、俺に飛びついてきた。

「あのー、香咲さん。そんなにくっつかれると、そのー、む、胸とかが…」

香咲さんは、けっこう胸がデカイ。ハルの胸の1.2倍はある。

え、ハルの胸のサイズを知らない？あいつは82センチだ。この前の身体測定の際にバストの覧を異様に自慢してきたぞ。

「あ、すみません！」

彼女は、俺から離れると、すまなさそうな顔をした。

「いえいえ。」

俺はとつさに少し会釈をした。

「あ、谷山君、この後、一緒にご飯でも食べに行きませんか？」

ちょうどその時、俺の携帯が鳴った。

「もしもー」

「お兄ちゃん、おそーい！いつになったら帰って来るの？」

「あ、その事なのだが、今日は晩御飯要らんから。」

「はっ？何言っ―」

俺は電源を切った。

これは、死亡フラグ全開だな。

「て、事で妹の許可も出ましたし、晩御飯食べに行きましょうか。」

彼女は、少し笑いながら、

「はい！行きましょう」

ここは、某レストラン。

俺と彼女は、椅子に座りながら、料理が来るのを待っていた。

「香咲さん」

「あ、私の事わユリと読んで下さい。」

「そうですか？、でわユリさん。」

「はい何でしょう谷山君。って、谷山君の事は何て呼べばいいでしょう。」

「あ、俺は谷山でも、高志でもどちらでも構いませんよ。」

「あ、じゃあ高志君で。」

「わかりました。」

「で、ユリさん、俺達が付き合ってる事、内緒をお願いします。」

「あ、はい、こちらもそのつもりでしたし。」

はあ、こんな美人と二人きりだと、会話が緊張して出来ん。

「いらっしやいませ！」

一人女性が入って来た。

「繁盛してますね」

少し、詰まった会話を和らげた。

その女性は、俺らの隣の席に着いた。

ナイス見ず知らずの女…いや、あの顔はハルだ！俺は持っていた水の入ったグラスを落としそうになった。

ヤバイ、バレないようにしな―

「お兄ちゃん！」

「バレたー！」

「や、やあハル。」

「ちよ、何でこんな所に居るのよ！」

「いや、晩御飯をつて何でお前が居るんだ！」

「一人分のご飯を作るのがめんどくさかったからよ！」

と、ハルが俺の隣の女性に気が付いた。

「お兄ちゃん？こちらの女性は誰かしら？」

「誰って知ってるだろ。同じクラスのー」

「そういう事を言ってるんじゃない！」

「何で一緒に…しかも二人きりで居るのかしらね？」

「いや、ほら、あれだ、その、何だ、ほれ、友達としてだな」

背水の陣状態にされ、絶対絶命で、修羅場のバカ力も撃沈し、袋の谷山になった俺は口をつむんだ。

「私、高志君と付き合ってるんです。」

ふと、ユリさんが会話に武力介入して来た。

「え、お兄ちゃんと！」

「冗談に50000円」

「残念だったな、50000円は貰った。」

「えー！、本当に付き合ってるの！」

「はい」

「何時から？」

「今日からです。」

「うちのお兄ちゃんに騙されちゃ駄目よユリ、コイツの告白がいか
にうまくても、それは机上の空論だからね！」

「残念だったな、告白したのは、俺じゃない。」

「はー！ユリが告白したの！×10000」

「はい。」

「こんな、変態で妹の着替えを見て喜ぶような人のどこが良いの！
？」

「変態で妹の着替えを見て喜ぶような人で悪かったな、訂正しておくが、あれは事故で、ちゃんと謝った。しかも土下座で！」

「はいはい、そうですか。」

「まあ、じゃあ私も、この席で食べようかな。」

「はあ、何言つてー」

「まあまあ、良いじゃない、高志君」

「ほら、ユリもこう言つたるんだし。」

「分かった。」

そこから、俺は妹に悪口を散々言われ、その度にユリさんの誤解を招き、そうなるたびに誤解を訂正するという、流れ作業ベルトコンベヤー方式を続けた。

一樣、晩御飯は食べたが、食べた気がしない。

「そろそろ、帰りましょうか。」

「そうですね。あつ、送って行きますよ。」

「大丈夫ですよ。」

「いえいえ、夜道を貴方みたいな可愛い女の子一人にするのは危険ですから。」

「私は先帰ってるね。」

「おう。」

「ちよつと、私も送っていきなさいよ！」

「何で！」

「夜道を私みたいな可愛い女の子一人にするのは危険だから」

「お前なら大丈夫だ！いざとなったら、キン。クバスターを決めて、とどめにイデ。ンソードを決めてやれ！」

「私は、どこの超人だ！」

「どこつて、日本の」

「バカ」

「はいはい、送って行きますよ。」

そして、某レストランを後にした。

ユリ家につきました。

「あの、本当に貴方の家ですか？」

「はい、そうですけど」

「いえ、貴方の家の三軒隣がウチ何ですが…」

「へえ、そうなんだ。」

彼女は特に驚いた様子もなく。

「じゃあ明日から一緒に行きましょうよ。」

まあ、少し呑気な性格ですから…

「良いですね。」

「じゃあ、私から誘います。」

そして、家に帰り、風呂に入り、寝た。

俺には、最高の桜が咲きました。（春到来だけに）

中（後書き）

感想を書いたら、何かしらの良いことがあります。

下… だけどまだ終わらない

それからしばらくの時間が経った。

あの約束、

「一緒に学校に行きましょう」は果たされていた。

しかし、学園のアイドルは学園から姿を消した。

姿を消したという表現ではかなりの時間、学校を休んだ用にとらえられてしまうが、そうでは無い。

今日は3日目であり、別に不思議で有るわけではない。

しかし、彼女は体が丈夫な方で学校を休んだ事も無い位である。

まあ、アイドルはファンから心配されていた。

その反面、スキャンダルも出てきた。

3日の間でトップ記事16個。噂の数はどんどん増えて行く。
凄いのでは妊娠説。

最高傑作が、彼女の美しさ故の、輝夜姫伝説などである。
ちなみに輝夜姫伝説は俺の自信作である。

彼氏の細やかな自慢である。

しかし、先ほどの妊娠説は急に勢いを増した。

理由は、病院で彼女を見た生徒がいたからである。

勿論、俺はその説を認めてはいない。

何故ならそんな事をしたのは妄想内中である。

妄想で子供が作れたら、少子社会は大万歳である。

が、病院と言う部分には異様に引っかけた。

入院となればそれなりに休むのも当然である。

俺は、1年の、彼女いたと思われる病院を知ってるヤツの所に乗り込…訪ねた。

「県立岬病院ですが」

その言葉が異様に引つかかった。
県立岬病院は、ここら辺でも大きな病院である。
そんな所に要るなんて…かなり心配である。

学校帰り、俺はメイドを仲間にフィアンセのいる白い建物へと向かった。

フロントでキーアイテムである面接許可証を手にいれ、輝夜姫が囚われている、牢獄へと向かった。

途中…

つて、もういいか。

会話が少ないから、調子に乗りましたこと、深くお詫び申し上げます。

さて、緊張の一瞬。

ドアを開けた。

そこには、姫がいた。

「高志く…ん！」

驚いている姫。

「ユリどうした！」

俺の言葉に少し表情を崩した。

「その…出来ちゃったの。」

俺付近で猛烈な殺意を感じる。

「は？」

「だから貴方の子供が出来ちゃったの」

その言葉を聞きおえたと同時に、結構低いが体中に響く音がした。

正確に、句読点を含まずカタカナで説明すると、

ワガメイドノサツイガウチヨウテンニタツシテサツイノコモツタケ
リヲモロニクラッタ

我がメイドの殺意が有頂天にたっして、殺意のこもった蹴りをもろに喰らった

という、シンプルで斬新な説明になります。

「あの、嘘ですよ」

ユリのその言葉で蹴りは止んだ。

「そういう、命に関わる冗談はやめてください。」

「あ、すいません。」

そっぴいながらも顔は笑っている。

「で、何で休んだの？」

メイド発言。

今までの鬼とはうって変わっての優しい声

「いや、本当に何でもありませんよ。ちょっと風邪で熱が下がらないぐらいですから。」

その発言をした時の笑顔は彼女の最高の演技だと思っただのは俺だけだったのだろうか…

「え、じゃあもう退院をできるの？」

俺だけだった見たいです…

「はい…」

病院を後にした。

「え、じゃあもう退院をできるの？」

「はい…」

この言葉を信じてきた。

あれから毎日病院に行って見たが、彼女の退院する気配はなかった。学校の情報では風邪になっているが怪しくなってきた。

もう、あれから1週間。

彼女は一向に治る気配は無い。

日に日に薬の量は増えて行った。

流石の俺でも、不思議に思い、フロントで看護師に聞いた。

「ああ、128号室の方ですか…。肺癌ですね」

「肺癌！」

「え、ちょ、肺癌で食べ物だよねお兄ちゃん。」

.....

息が止まると言う感覚はこういう事なのか…

時刻は0時―

あれから、色々考えた。

やっぱり、待つてるだけじゃ何も変わらない。

自分から何かアクションを起こさなければ意味がない。

医療関係はさっぱり解らないし、それは専門家に任せよう。

じゃあ、俺がして上げれる事とは…

そう考えた俺は、いいアイデアを考えだした。

学校で皆に呼びかけたそのアイデア。

全校生徒1802人が乗ってくれた。

そして、そのサプライズは幕を閉じた。

俺は久しぶりに病院にきた。

しばらくの間、病院はメイドに預け、俺はサプライズにつきっきりになっていたからだ。

「ユリ」

「高志くの久しぶり、どうして―」

「これ。」

俺は一枚の紙を手渡した。

一枚と言っても、模造紙一枚である。

そこに書かれた、無数の文字。

『ガンバレ』

「ユリ、これ、全校生徒から。」

「え…」

それを聞いたユリは泣いていた。

かすかにこぼれる涙は…

月の用に輝いていた。

最終（前書き）

俺×恋3最終です

最終

彼女は今日、退院する。

看護師や医師に見送られ、病院の出口を出た。

そして、俺にこう言った

「リコさんから聞きましたよ、私、輝夜姫なんですね。じゃあ、私の望み、『退院』は、貴方に勇気づけられたからできたんですよ。貴方は私の王子様ですね。

そして、もう一個願いがあります。」

「キス…しても良いですか？」

「…」

「ええ、勿論、お姫様」

「チュッ」

厄介事は始まった。

あのキスは、なんと、かの有名な新聞部の部長の手に写真と言う形で残っていたので有りました。

理由は不明なのだか、何やかんやで彼女の事をよく知っている俺を怪しいと思っらしく、ずっと俺をつけていたと言う説が後々、上がってきた。

そこから、新聞部は、ストーカーパパラッチと呼ばれる用になったのだが、まあそれは別の話。

隠し事がバレ、何やかんや冷やかしの的になったがそれでも日々は幸せだった。

変わりゆく日常。

不幸の無い人生。

かけがえのない彼女。

かけがえのない家族。

かけがえのない友人。

一度治った歯車はかなりの間、正確である。

そんな哲学的論理を考えながら生活するとは、流石に俺も思っていなかった。

そうそう、あの日以来、キスはしてないが、ストーカーパパラチ達の、超一大スクヤンダル『アイドルは…』に乗っている写真を見て思った。事がある

王子様なら、こんなニヤケ顔でキスなどしないだろうと…

今は2年の春休み。正確には3年の春休み。

ユリは月に里帰りしていて、電話かメールくらいでしか連絡をとっていない。

そのせいかも知れないが最近、悩みが出来た。

急に妹が気になりだてきたのである。

この主人公、馬鹿だなと思う人多いだろ。

いくら血は繋がっていないからって戸籍上妹なんだから叶わない恋だと。

しかし！、衝撃の事実が明らかに。なんと、戸籍でわ谷山でわなく、旧姓であつたのだ。

美少女に囲まれた少年の羨ましい苦悩。

もうすぐ高校生活最後が幕を開ける。

受験勉強の苦悩よりも、美少女絡みの苦悩

我ながら、最高の青春だよ

最終（後書き）

3 も終わりました。 4（高校生活最後の物語）で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2706g/>

俺×恋メイドは(妹)3 ~ The Lily Story ~

2010年10月10日15時14分発行